

清水港・みなと色彩計画推進協議会（静岡県静岡市）

世界に誇る美しい みなとまちづくり

清水港・みなと色彩計画
推進協議会 委員
(アドバイザー会議座長)

ひがし けいこ
東 恵子



1. 静岡市の概要

平成15年4月に、旧静岡市と旧清水市の合併により新たに誕生した人口約71万人の静岡市は、関東圏と中部圏のほぼ中央に位置し日本の東西を結ぶ国道一号線、東名高速道路、東海道新幹線が通る交通の要所になっています。

北は3,000mを超える高峰が連なる南アルプスから南は日本最深の駿河湾に至る多彩多様な自然を有しています。また急峻な山や急流が目立ち、駿河トラフに近いために、大地震の危険性も指摘されており、防災にも力が入れています。

■清水港について

清水港の歴史は、古く西暦600年代まで遡りますが、近代港湾としての幕開けは、1899年の開港場指定から始まります。



富士山を臨む清水港の全景

お茶の海外直接輸出に始まり、缶詰、オートバイ、楽器等、静岡県内をはじめとした近隣地域の生産品を中心に、臨海部の工業化の進展に合わせ、港域と機能を拡張しました。また、時代の要求によるコンテナ輸送への対応にもいち早く応じ、国内有数の輸出港として成長するとともに、木材、大豆、ボーキサイト等の原材料の輸入港としても、県内及び中部日本圏経済を支え、高度経済成長期の日本で重要な役割を果たしてきました。

2. 活動開始の背景・経緯

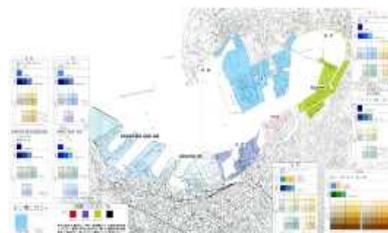
清水港は天女伝説の三保の松原、富士山を借景にした日本を代表する素晴らしい風景を持つ静岡県の国際

拠点港湾です。しかし当時は他の多くの港と同様に、紅白の煙突や老朽化したタンクや倉庫が建ち並び、汚く殺伐とした港であり、その素晴らしい風景が活かされていない港でした。

平成2年、このように工業地化し市民が立ち寄りなくなった港湾空間を、物流、生産機能とともに生活機能の回復を目的に、暮らしの視点から「レディス・マリン・フォーラム」を立ち上げました。このフォーラムは20代～60代の女性23名で結成し、「食べる」「憩う」「見る・景観」の分科会を設け、1年間のワークショップのもと「レディス・マリン・フォーラムリポート」として提言を行いました。その提言をもとに費用がかからず実効性のある計画として、その翌年「清水港・みなと色彩計画」を策定しています。

3. 計画の概要

自然景観と調和した人工景観を創出しようという、この色彩計画は平成4年度から実施しています。臨港地区の500haを港湾機能や将来方向に応じて、それぞれの地区にまとまりを持った色彩方針を立てました。その地区の建築物、工作物等をそれに即した色彩に塗り替えることにより、住む人、働く人、訪れる人々に快適で活気のある、個性あるみなとづくりを行うことを基本目標としています。



配色パレット

計画の実施にあたっては、港湾関連事業者の自主的な取り組みによる届け出制をとっています。当初は塗

り替えに費用がかかることや企業に独自のCI（コーポレートアイデンティティ）があることから対象企業の6割強もの賛同が得られず計画の実行性が懸念されました。このため、協力を得やすい色彩構成の提示、協議会・アドバイザー会議、企業の相談に応じやすい体制などの仕組みづくりを行い、協議案件のある企業にはアドバイザーが出向きCG（コンピュータグラフィックス）などを用いて、それぞれの企業の個性や独自性を活かしながら周辺環境との調和を図るように提案しました。

その結果、港湾施設・工作物の塩害防止のために5～7年毎の更新時期に合わせて周辺環境に調和した塗り替えが行われ、年間30件～50件の塗り替え相談が行われるようになりました。清水港は、物流ヤード、冷凍倉庫群、LNG基地、製造工場群、海水浴場まである多機能な港であり、人の集まる賑わい空間の日の出地区の対岸にはタンク、煙突、ベルトコンベアの工業群が見えます。この色彩計画の実施により、これらの産業景観を洗練された風景に演出しています。



タンクの塗り替え事例

この計画の特徴の一つとしてシンボルカラーの設定があげられます。シンボルカラーは、「美しいみなとづくり」のイメージをリードする役割をもたせ施設・工作物に必ず一部に設置することをお願いしています。

また、清水港の景観として象徴的な機能をもつ施設には、港のシンボルカラーであるホワイト(9.5N)とア

クアブルー(10B 7/8)で配色計画をしています。このシンボルカラーの設定は計画策定時、市民・企業の清水港の将来求めるイメージとして挙げられた「刷新した、真新しい」の意味を持つ色として抽出しています。

4. 実施事例

具体的には、航空法の適用から本来紅白であるコンテナクレーンも、日本で初めてシンボルカラー配色により洗練された色に塗り替えられています。クレーンは「鶴」の意味をもち現在コンテナバースの荷役に9基が活躍しています。また、大きなタンクにもアクセントカラーでラインを施し圧迫感を軽減し、グラデーションによる配色計画で空間にリズムをつけています。かつて、高さ145mの煙突の塗り替えを、企業が1億1千万円の費用を負担し、周辺6万5千世帯の同意書を取り付けて行ったこともあります。



クレーンと富士山

航空法により、高さ145mの煙突は紅白に塗らなければならないことになっています。この煙突を色彩計画に添った色に塗り替えるため、高度障害灯を設置することにしましたが、このため、煙突から半径5km圏内住民の9割の同意書をとることや地元清水市の景観条例を制定することなど多くの手続きが必要となり、そのひとつひとつを市民、企業、国、県、市の各機関の連携によって解決し、計画に添った色に塗り替えることができました。また、全国展開する電気量販店、遊興施設など大規模商業施設の建設が次々に計画され、企業のCI計画により、彩度の高い色彩使用や大型屋外広告物などが提案されましたが、清水港のローカルルールとその実績を提示することにより、協議に時間はかかりましたがご協力頂くことができました。

5. 市民の港へ

平成10年の清水港開港100周年を機に、日の出地区再開発事業が完成し、民間による商業施設や親水緑地公園、マリーナなどと共に有形文化財に登録された荷役機械のテルファーが整備され、市民の憩いの場となりました。平成17年の清水港港湾計画において、日の出周辺地区が景観形成重点地区に定められ、平成20年11月には、静岡県景観条例が制定され、日の出地区は地権者の同意を得て景観重点地区に指定されています。民間によってすすめられた複合商業施設『エスパルスドリームプラザ』の開設は、「見る・買う・食べる・遊ぶ」としてショッピングから寿司横町、ちびまるこちゃんランド、Jリーグエスパルス紹介コーナー、西伊豆紹介コーナー、老若男女に人気のシネマコンプレックスなどが揃い、当時の「レディス・マリン・フォーラムレポート」の提言をすべて実現することとなりました。

市民から「清水港」はもっとも好きな所でもあり、嫌いな所とあげられて以来20年、いまや、みなと祭りをはじめ、マグロ祭り、大道芸、フラワーショーなど年間を通したイベントが開催され、港の緑化・清掃活動、小学生の港見学会、伊豆を結ぶ駿河湾フェリーの運航などを含め年間880万人の人々が訪れる賑わいある港として成功しています。特に平成2年から客船誘致委員会が設立され、富士山と調和した美しい港をセールスポイントにした誘致活動が行われ、クイーンエリザベス号、飛鳥、パシフィックオーシャン、咸臨丸などの寄港により港への魅力と関心がますます高まっています。



日の出地区の複合商業施設

6. 事業評価

市民・企業に対して定期的に行ってきた事業評価アンケート調査では、

約8割の回答者から港が美しくなったと評価され、誇れる景観として、日の出地区再開発整備、港湾荷役作業のコンテナクレーン群があげられています。また港湾関連企業は、職場環境の向上、緑化、ライトアップ、工場内見学など自らできることへの取り組みを積極的に行っており、港湾環境に対する社会貢献への意識の変化をみることができるようになりました。このように、色彩イメージ効果を活用した一件ごとの取り組みは、景観への価値観と理解が深まり共通の規範が形成されました。このことにより「世界に誇れる美しいみなとまちづくり」のネットワークが構築され、美しい港固有の価値を引き出しています。経済効果はもちろんのこと地域の人々のみなとへの関心に加えて、企業や市民に「My Port意識」が生まれたことが何にも代えがたいものとなっています。



みなとの賑わい

7. 課題と展望

清水港・みなと色彩計画が策定され20年経過しましたが様々な課題が残っています。

その一つは、対象地域である臨港地区内の企業協力は得られてきたものの、港湾機能の変化に伴い企業や市民への港に対するニーズを捉えた景観・色彩計画に進化(リニューアル)させていくことです。

二つ目は、臨港区域から市街地へ美しさという付加価値を求めてエリアを拡大し「美しいみなとまちづくり」にステップアップすることです。

港を核として都市と一体になった個性豊かな景観は、市民の港への理解を深め、郷土愛を育み、地域振興を担います。訪れる人、働く人、住む人にとって快適で感動的な清水港次世代を担う子供たちは、この環境を範として、美意識、感性を育てていきます。今後ますます地域全体の取り組みを進めていきたいと思えます。